

一	い	か	な
冊	+	し	フ

海原純子・選
(心療内科医)

文読む月日

トルストイ著
北御門二郎訳

ちくま文庫 上・中・下巻 各1650円

本棚に一冊ずつ並んでいる文庫本がある。トルストイの『文読む月日』上中下だ。それぞれ一冊は表紙が比較的きれいだが、もう一冊は陽に焼けてセピア色に変わっている。しかし共通していることは、どの本もブルーやピンクの付箋がぎっしりつけられていることだ。

何故一冊ずつあるかというと、引っ越しの時、段ボール箱に詰めるのをやめ、この本だけ別の場所にしまって大事に運ぼうとしたら、行方不明になり、仕方なく新しくまた本を買い直し、新しい本を読んでは付箋をつけてしばらくした時に元の本が出てきたという経緯があるからだ。そのくらい、私にとっては意味がある文庫本だ。

『文読む月日』はトルストイの書いた小説ではない。トルストイが多くの著作や箴言集からさまざまな思想を選んで収録したものである。さらに彼自身が書いたエッセイや寓話も含まれている。箴言集の範囲は非常に広く、カントやシラーの言葉、聖書、『タルムード』、仏陀の教え、マホメット、老子、孔子など時代を超えて、宗教を超え、地域や国を超えた著作の中からトルストイの心に響いた言葉や文章が集められている。トルストイは、第一版が出たとき、とても喜んで、「自分の著述は時が経つにつれて忘れられるであろうが、この書物だけはきっと人々の記憶に残るにちがいない」と語っていたという。

さうに序文の中でトルストイは、自分がこの本を世に問う目的は原作者の言葉をただオウム返しに翻訳することではなく、こうした偉大な思想の恩恵を受けつつ読者にさまざまな思想と感情を喚起させることが出来る日々の読み物を提供することである、と語っている。一月を一章として一年三百六十六日の名言が集約されているこの本、壁にぶつかったと思う時、あるいは心が泡立つ時、この本を開き読み始めると気持ちが洗われるのだ。

今コロナ禍で心が晴れず毎日が雨降りのような気分の時は、「苦悩は活動への拍車である。そしてわれわれは、活動の中にのみ生命を感じる」というカントの言葉に元気づけられる。もう一つ今は特に、「人間にとつて最大の幸福は——自分が、一年の終わりには一年の初めと比べてより良き人間となつていると感することである」というソローの言葉が気になっている。困難が続くと心が荒みがちだ。困難な中で何ができるか、どう生きるべきかそれを自分に問うひと時をこの本と共に過ごしたい。

